

「個性と多様性を生かす佐伯地域づくり街(まち)づくり」のために合併、財政、人口問題を通じて考える (後半)

講師 元道の駅やよい総支配人 田村 志朗 氏

・中心市街地、大手前問題 オール佐伯市の視野で考えよう:



商業統計調査による佐伯市の商業機能の推移の中の中心市街地の店舗数と従業者の推移を見ると、

	H. 6年	H. 9年	H. 14年	H. 19年
店舗数	429店	347店	218店	177店
従業員数	1,832人	1,445人	916人	777人

平成10年10月	トキインダストリー出店(郊外型量販店)
平成14年 2月	大手前寿屋閉店
平成18年11月	コスモタウン出店

コスモタウンは「佐伯都市計画事業」平成8年8月に計画決定され、41.3haの広大な土地を造成し、事業目的の中に「市街化の波が一層強まり … 流通の業務機能の集積 … 良好なる市街地の造成を目的とする」とある。

佐伯市はトキハイダストリー出店前の平成8年から今日のコスモタウンを計画していた事になる。

当然、仲町、本町、大手前を中心とする商業地は成り立たなくなる事は予測していたはずだ。

市、商工会議所、中心市街地の商業業者、地域住民は何を対策したのだろうか？

中心市街地や大手前開発問題は、平成8年にコスモタウン造成の時に既に始まっていたのではないか。大手前開発市民会議のメンバーも旧町村周辺部をバスで回り、その中で大手前の果たす役割があるのか、あれば何が役割なのか、ということを考えていけば議論は進むのではなからうか。

・克服したい私達の弱点:

①情報発信はとても大事です。

世界一〇〇、日本一〇〇、大分県一〇〇、中身の無い表現は力になってないし逆効果になっていませんか。ナンバーワンよりオンリーワンの時代と云われます。他所から次は宇宙一かなと言われてます。こういう表現は、他所が評価する言葉ではないですか。その他いろいろと言葉の遊びで済まされている表現が多い。

②全ての事象には二つの側面がある。常に同時に考え対策し備えよう。

対立用語にピンチとチャンス、メリットとデメリット、光と影、シャワー現象とバキューム現象などがあります。前述した高速道路の取り組みで述べたように、一時的現象でなく持続して又来たいという魅力を佐伯市は作りえたのでしょうか。

逆に便利になった故に、佐伯の人が外に出かけるバキューム現象とならないでしょうか。光を追い求めてその風に乗ろうとする事はあっても地味な影の対策をしようとする動きがない事は、チャンスをピンチに自ら招いていませんか？

③手段が目的にすり替わる弱さ

合併特例債はあく迄も手段であって使うことが目的ではない。目的意識の欠如から始まると云われています。

・佐伯市が佐伯であり続けるために:

◎大分大学、中澤高志教授の指摘の中から

①合併して「海あり、山あり、川あり、歴史あり」となった個性と多様性をどう生かしているのか

②地域で頑張っている人に光を当てる…合併をきっかけにどれだけ連携が具体化したか

③合併により「佐伯市」という枠にひとくくりにされることで各地域の特色を出した情報発信が難しくなっている

④スポットとスポットを繋ぐ面的観光を行なう

- 例A) 海の手コース：
蒲江インターパーク基点に道の駅かまえ～マリナルチャー～空の公園～米水津水産工場見学
- 例B) 山の手コース：
道の駅やよい～本匠～直川～宇目各地（トトロのバス停、木材団地、道の駅うめ）
- 例C) 街の手コース：
城山～山手から海軍基地跡～海の市場
(コース案内 又は 小型バス観光)

◎由布院のまちづくりのリーダー中谷健太郎、溝口薫平氏の話(朝日新聞:由布院の今)

由布院は合併(挾間町、庄内町、湯布院町で最終的に合併した)にあたり、住民投票条例、町長リコール等町民は2分された。役場との関係を「対立的信頼関係」と位置づけ主張をぶつけ合ってきた。

観光協会が公共的なまちづくりの役割を担い役場が支えるという関係(今、最も理想的なまちづくり)であったが、今は一地域の観光を担う部門でしかなかった。歴史も風習も違う3町の合併は無理があった。でもその戦いは終わった。これからは3町それぞれの個性を生かし、多様を認め合い心を合わせていくしかない。

～ 私の提案 ～

・ 今、佐伯市の旧町村部に行くと「昔の役場は顔を知ってる人ばかりで話しやすかったが、今はよその町の人に来ていて、この町の歴史や大切にしているものが何かを知らない人もいる。役所と市民との距離はどんどん広がっている。」と危ぶむ声が多い。

・ 各振興局内に、地域づくりグループが集える場所を設置する。

・ 市議会で、各振興局長から報告と問題点提起をし、中心部の問題に偏りがちな議会運営を改革する。その場合大事なことは、地域の御用聞きのような、従来ありがちな議員としてでなく、あく迄もオール佐伯の議員としての立場を堅持することだ。

・ 各地域振興局の質的充実をはかる。振興局を地域住民が気安く立ち寄れる核として位置づけ、人事配置は出来るだけ所在地の地域の人を当てる。春の人事で各地域振興局長が市民サービス課長兼務→振興課長兼務となり地域振興がメインの位置づけとしたことは評価できるが、更に前進し各地域に予算配分を増やし、頑張っている地域住民とそれを支える地域振興局に対し応分の予算を配分する。各地域に差が出ることはいとわれない。民と官の協働で地域力を向上させプランニングする職員を育てる。そうして行政依存型からの脱却をはかり「民で出来ることは民で」「地域で出来ることは地域で」という地方自治本来の在り方を再構築すべきだ。そうでなければ何のための合併だったのか、佐伯全地域の個性と多様性を犠牲にするのであれば、佐伯が佐伯でなくなる。

・ 又個人レベル、小さい活動に光をあてるべきだ。どんな成功している所も全て一人から始まっている。

・紹介したい私の知っている新しい動き:

イ) 非収益施設は佐伯市、収益施設は名護屋地区7地区と地区住民が出資した民間会社が整備運営する佐伯地区初めての形態：
… 「蒲江インターパーク事業」

ロ) オーナーが終戦前学徒出陣で佐伯軍事基地に3年間勤務したことと娘婿が蒲江出身という縁で、佐伯街の小売り集合体に地元6業種店舗の出店が出来た。
… 民間だけで運営される「カクイチタウン」

ハ) 佐伯市民の「おもてなし」を、訪れる人に分かち合いたい。
… 鶴岡発「ひとよこい」グループ

・プロフィール(前半の続き):

昭和50年	(株)興人パルプ倒産 管財人に早川種三就任、個人的にも薫陶を受ける(8月)。私の後半の人生の転機となった。
51年	管理課コパルチン営業担当(特命の任務)パルプ排液がパルプ本体事業を救う(6月)。
59年	依頼され箱根のホテル、会社再建に転進。
平成 3年	銀行に依頼され、横須賀タクシー会社再建に転進(4月)。
6年	家庭の事情で佐伯に帰郷(6月)。
7年	(株)興人に囑託で復帰。九州地区営業本部部长 消臭商品開発営業担当 九州全地域の百貨店、大手スーパーに販売ルートを作り流通業界の裏表を経験
10年	倉庫建設業大分支店開設準備 委託される(4月)。
11年	弥生町長より要請を受け「道の駅事業推進室」で開設準備(10月)
13年	道の駅やよい総支配人(3月)
15年	ホテル金水苑顧問に(10月)
20年	ホテル金水苑退任(9月)

娘(ドイツ、アメリカ在住)のお陰で、ヨーロッパとアメリカ、カナダに長期滞在し車で田舎周りを楽しみました。

以上、81年を8回の転職、住所も6回替り家族には苦勞をかけっぱなしで感謝しています。

- 以下 仕事と関係なく取り組んだ事を紹介(佐伯帰郷後)
- ・日田市民大学(自由の森大学学長 筑紫哲也、事務局 長 原田啓介 現日田市長) 10年間通う。全国の前向きに何かを求めて生きる人達と逢え自己啓発された。
- ・筑紫哲也氏講演会企画実現(株)興人佐伯工場創立50周年記念)
- ・上甲晃(松下政経塾塾頭) ホテル金水苑40周年記念
- ・鈴木利枝「津軽三味線を聞く夕べ」大手前商店街・彩の友共催企画
- ・第一回佐伯市長選「公開政策討論会」企画コーディネーター
- 現在 前向きに取り組む組織や人と人を紹介し 1+1=3にすることが私の残された仕事と思いやっています。

◎根のない木はない。根の張りが大きい程、木は育つ。

◎一周遅れのランナーがトップランナーに見えることがあるじゃないか。もう一度合併の意義を確かめよう。

「散りぬべき 時知りてこそ 世の中の 花も花なれ 人も人なれ」(細川ガラシヤ)

… 81歳の老害も顧みず。